四天忠義誉高橋

編輯　川上嵐造

画工　梅堂國政

梓　金松堂辻文

A485
5上

國定忠次義名高峰

女海

上巻

川上
鼠邉著
梅堂
國政画

金松堂蔵

人虎名革と止むるとい古人ゞ名言あり是的まる忠次ゞ
義名と小團次ゞ名誉ハ世ふも高島あるを知らざる人も
おごゞくと新古の事實も續る玉琴縁みも繁き糸道を
おぼつのなくを手解きの及ばね筆ふ書まハも爪をちろこの
歯もたゝ孫ど今更おんとせんすべおくポツゝくの雨ゞれ
ゞゞゝしもあ事の一心漸々ま五編とせヱとかゝ紀ちゝを
三味線ゝんゝゝで子鼠ゞあちゝまちゝと動きかゞり明
たゝる究とふさぐの術おくく生ま活ゝる鏡面皮ゝを押ゞ
業の始ゝゝ終恥の序言子鼠小僧と悔書ぬ

明治十三年四月

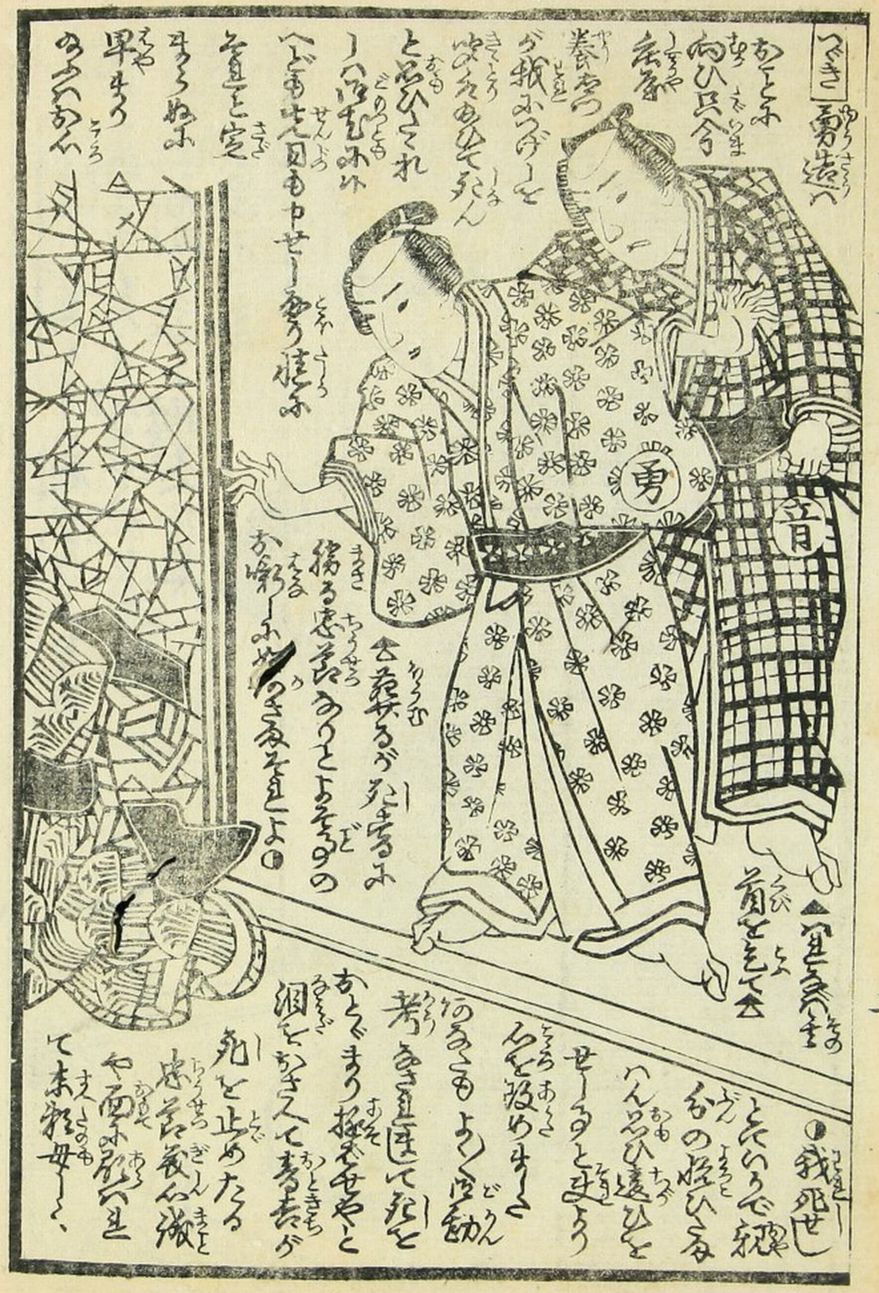
川上鼠邉述

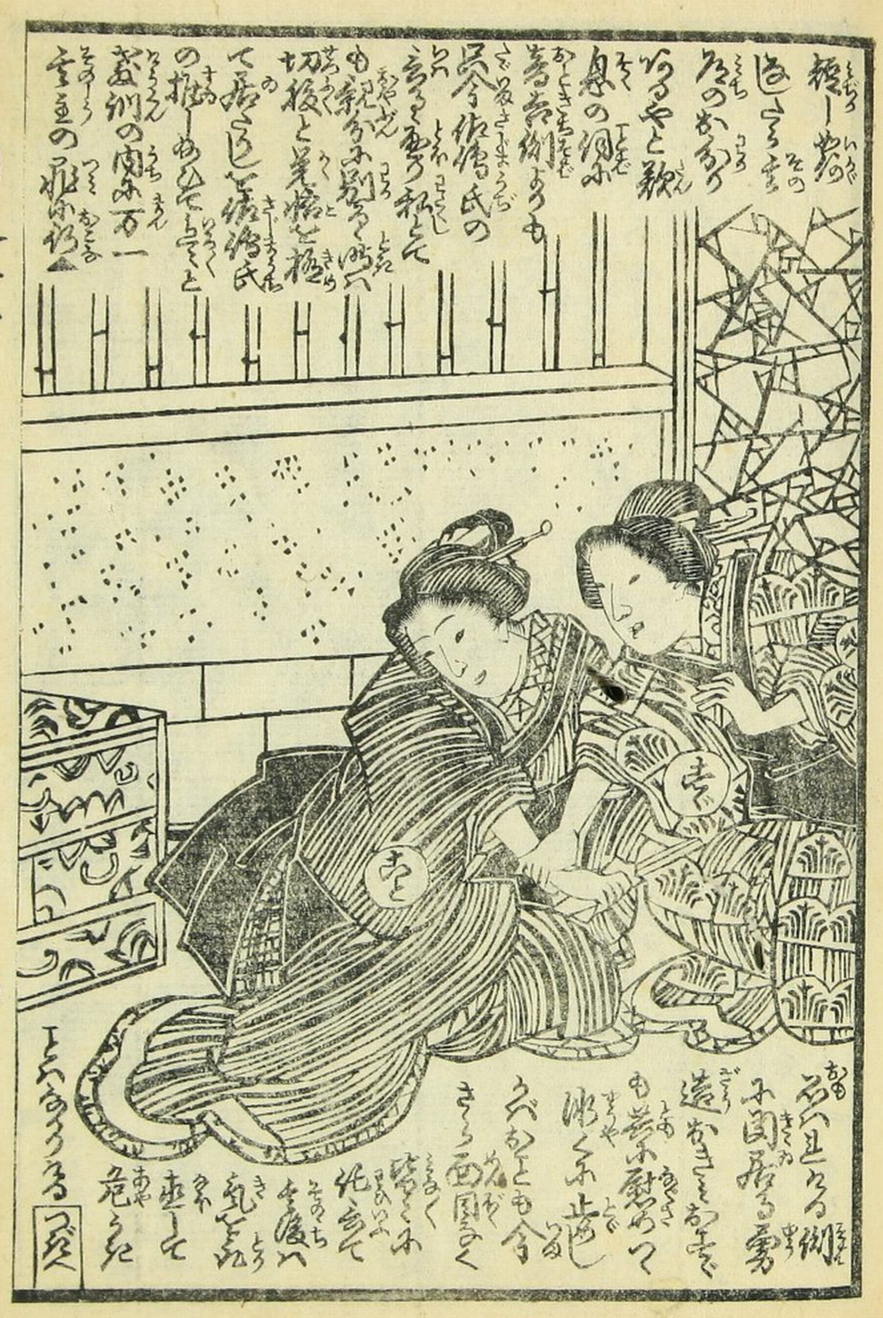
48-8215

うむろ琴柱
市川小團次

遊君玉琴

かくて又書きが如房かまぐい厠の房りみおとの
紙屋の源ふのまたより伝げきく祝けべおとん
見いいろふ角及さろをよ狗先人ないや
嵩んとうまありさる
かまぐい恩笑まあうや
とをり紙入る書ふ
勇造おきこと書き
もこせ入てとの作
ひるるよう縛った
なぐう書ふ
角及をのぐたへ
おとん悪しき
ゆる方もうより
外のとぞうた


つゞき
勇
音


まと
まと

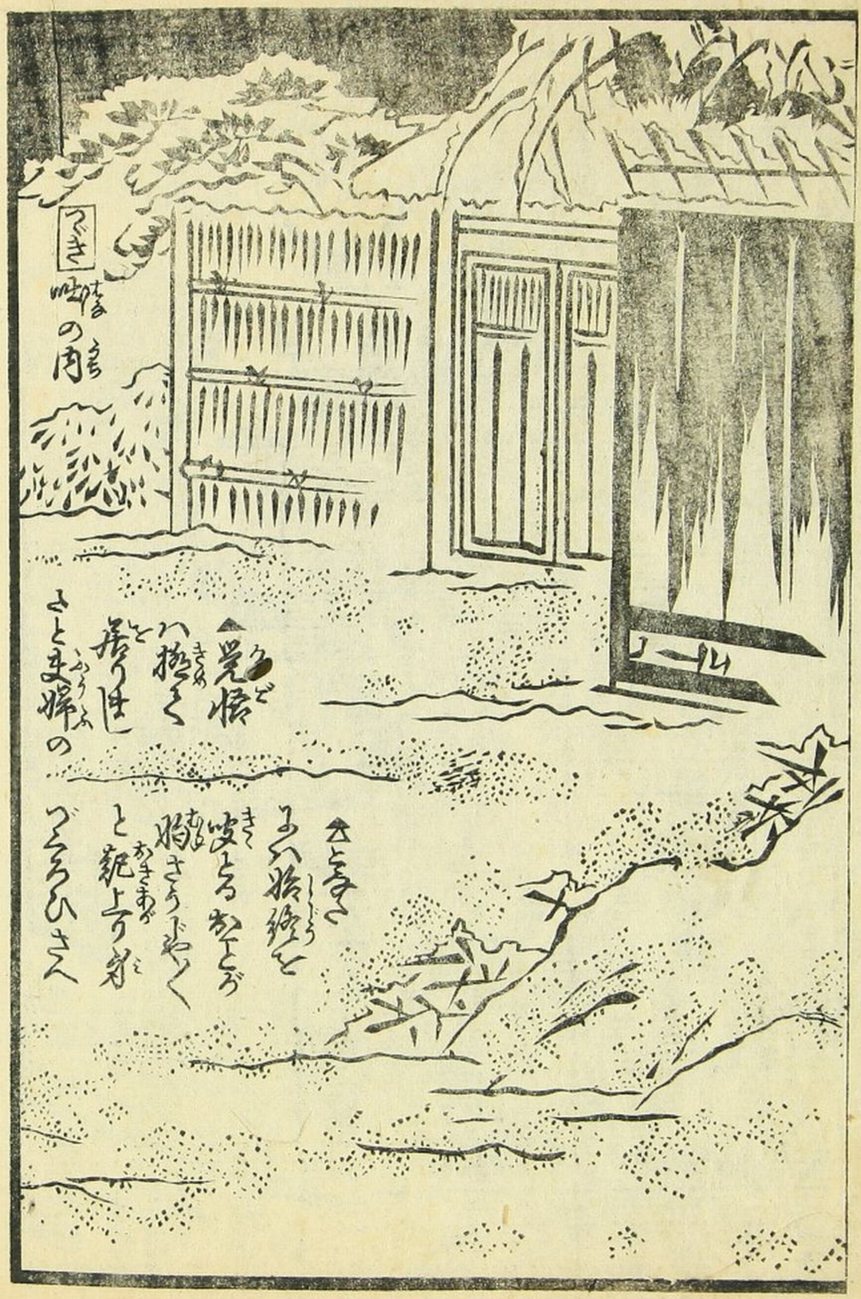
つゞき

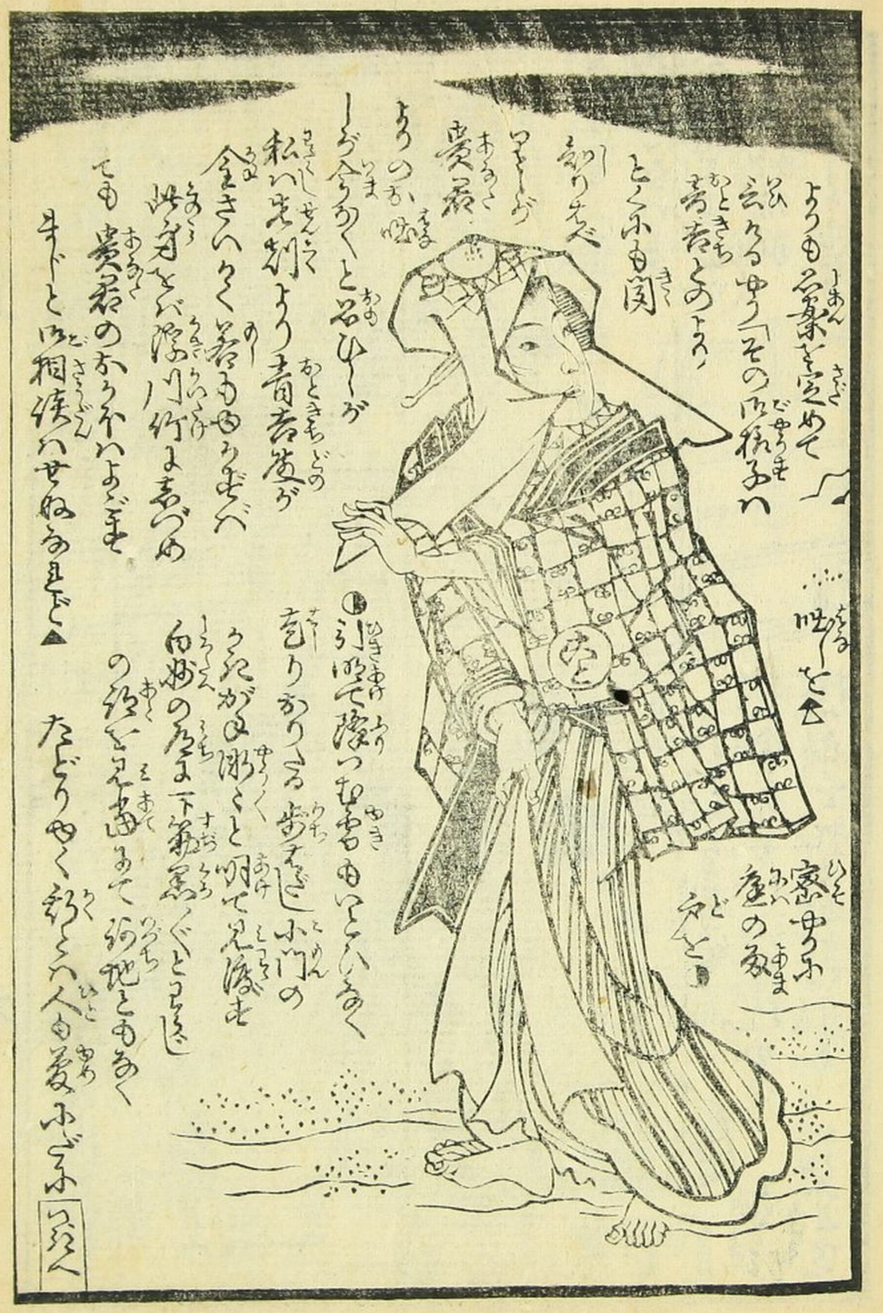
かくてその枝もくれなゐの雪をまとひ
赤城おろしのいと寒く
かとへ花はつたなげ
春もやらぬ夕の月
外の沼水にかゝる霞に七つ
さえ渡る霞に七つ
濡りの新屋に勇造夫婦
母はとく沖のかなたちひ
のむつごとうと変とと
あの濡りの味
勇造に向ひ
ふ向ひ「と」
まで色と

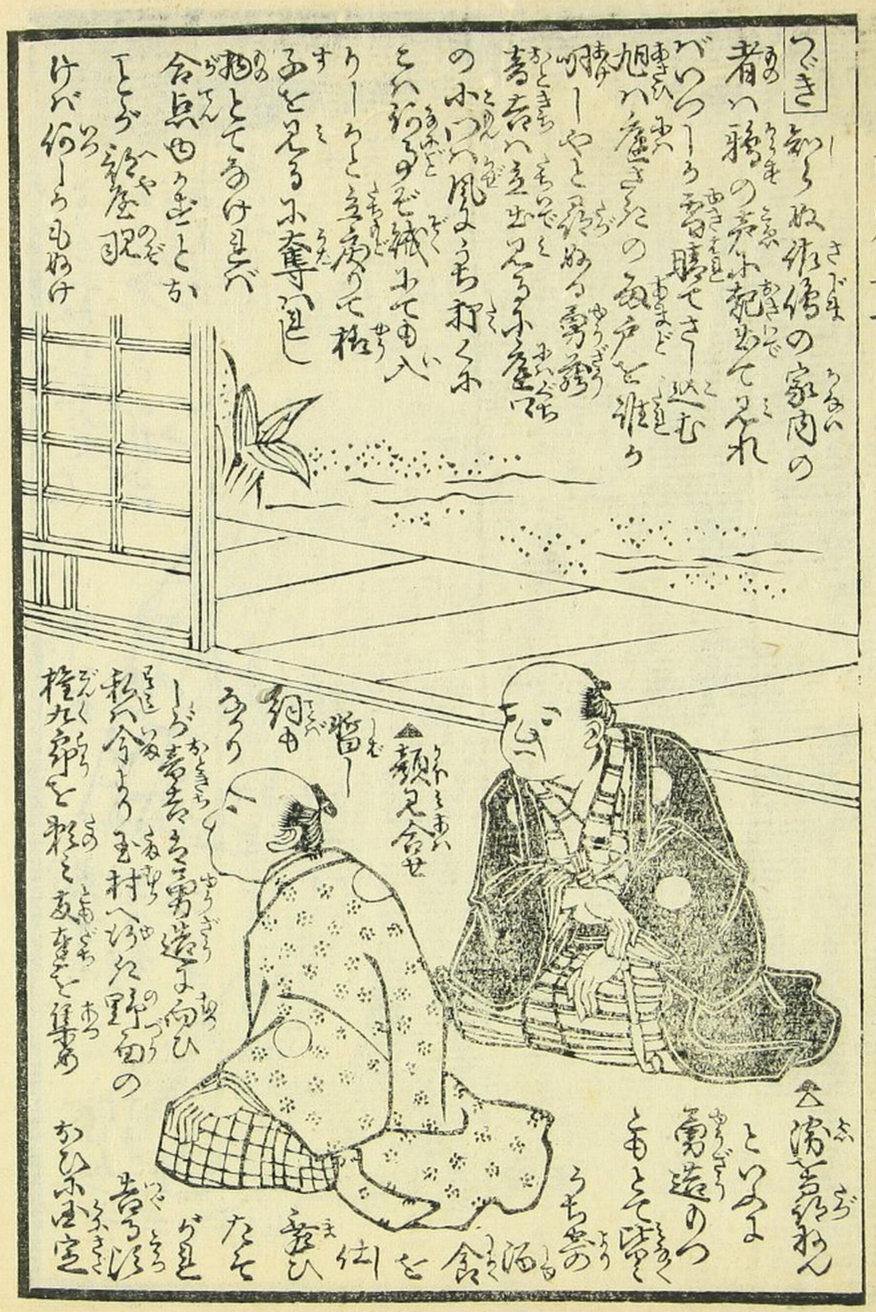
▲されど家を
ふ又一つの雑
佐人の
あさよ
の
てこの二人の
男が
忠次親
の

かくせしが実は
忠次親方は
偽者
思ひ十年
義と報ぜんとて
自ら
今は
牢内
あへまるに
此のかとて
実へあの父も
記うと
まで色と

▲
の牢内
▲
の物の
あの
金子
あの
金子
の
わかのであると
の
わかの

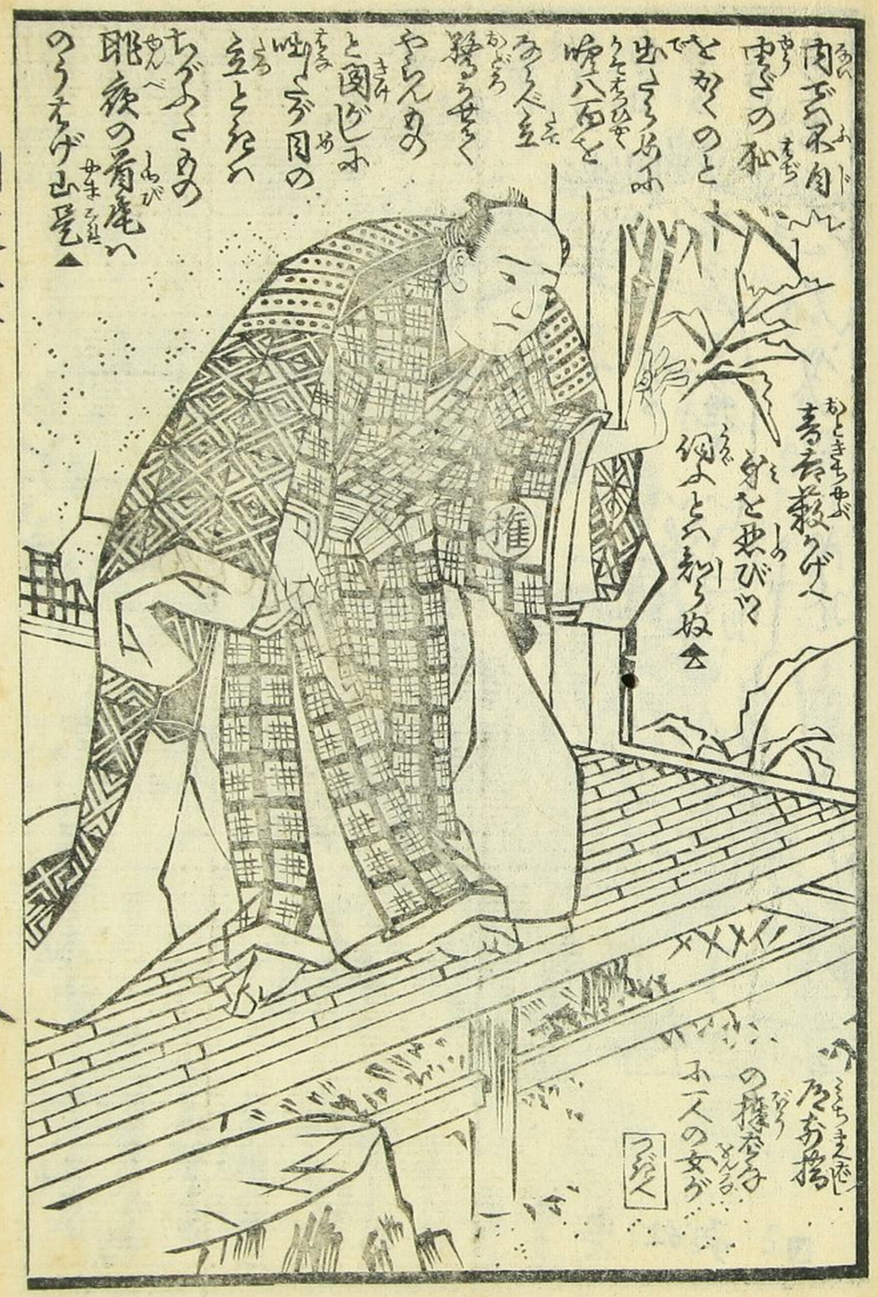

つぎ
吐瀉の用




つゞき
顔見合せ
酒
食を仕

勇
次へ

つゞき



てごさ
音
野

虎
元

官許 朝鮮 牛肉丸
名法
大包代一十五錢
中包代一十錢五厘
小包代六錢五厘

官許 たんせきの薬 天恭丸
一包代錢五厘

出願御届明治十二年四月九日
地本錦繪問屋 金松堂 日本橋區横山町三丁目二番地 出板人 辻岡文助
編輯人 川上謂一郎 麻布區元田廿五番地

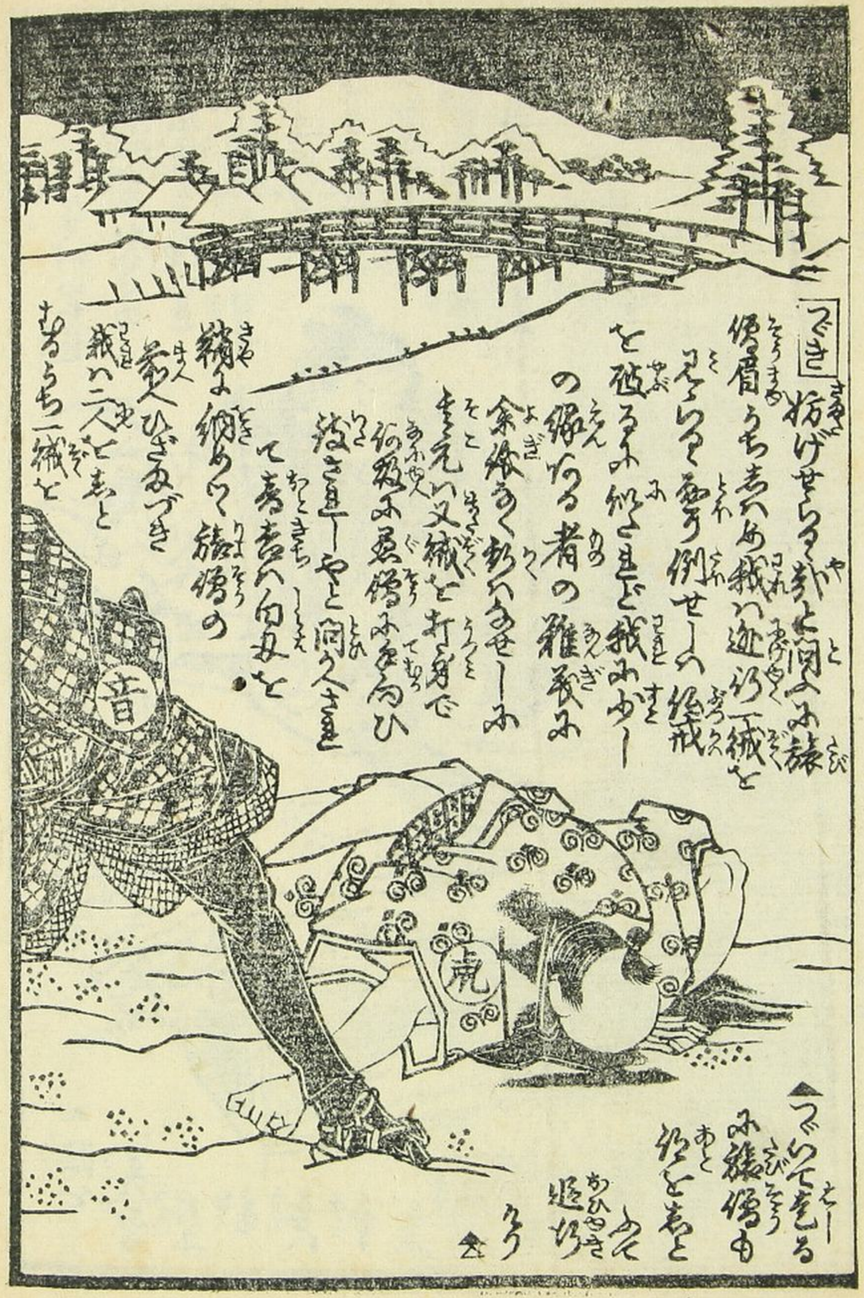
國忠臣
義名の
高島
芳年筆
大和
三社御祭礼
金松堂版
尼田駿長
中

國定忠次
義名高嶋

門上嵐遙編輯

梅堂國愛画

辻文
春稀

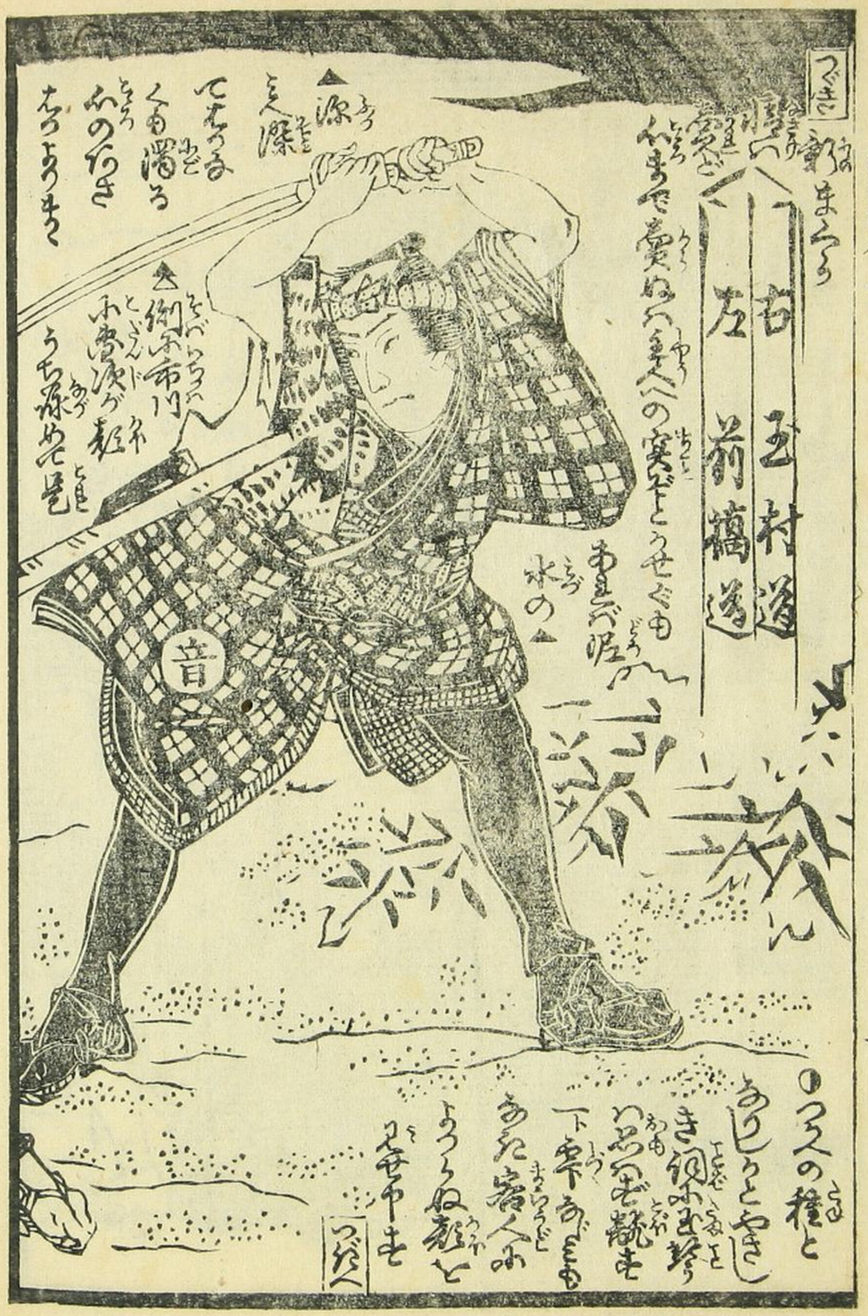


▲つゞいて走るみ縞傷も
あとを追ひかけ
▲

▲
「孝行ホ
貴れた人と
不孝ホ」
とハ傾城花女の
源氏物語
▲
つゞき

つゞき

古玉村道左前編遂



◆源義深

てたろうの
くも濁る
ふのたつさ
たろうもも

◆御ふ市川
ふ貴族が起
うち家めを見

水の◆

一茶

◐つゝの種と
ありしうとやき
き御ふ市琴
いろいろ鞠を
一下車あるも
あた客人の
ようろね起と
ひ金巾を

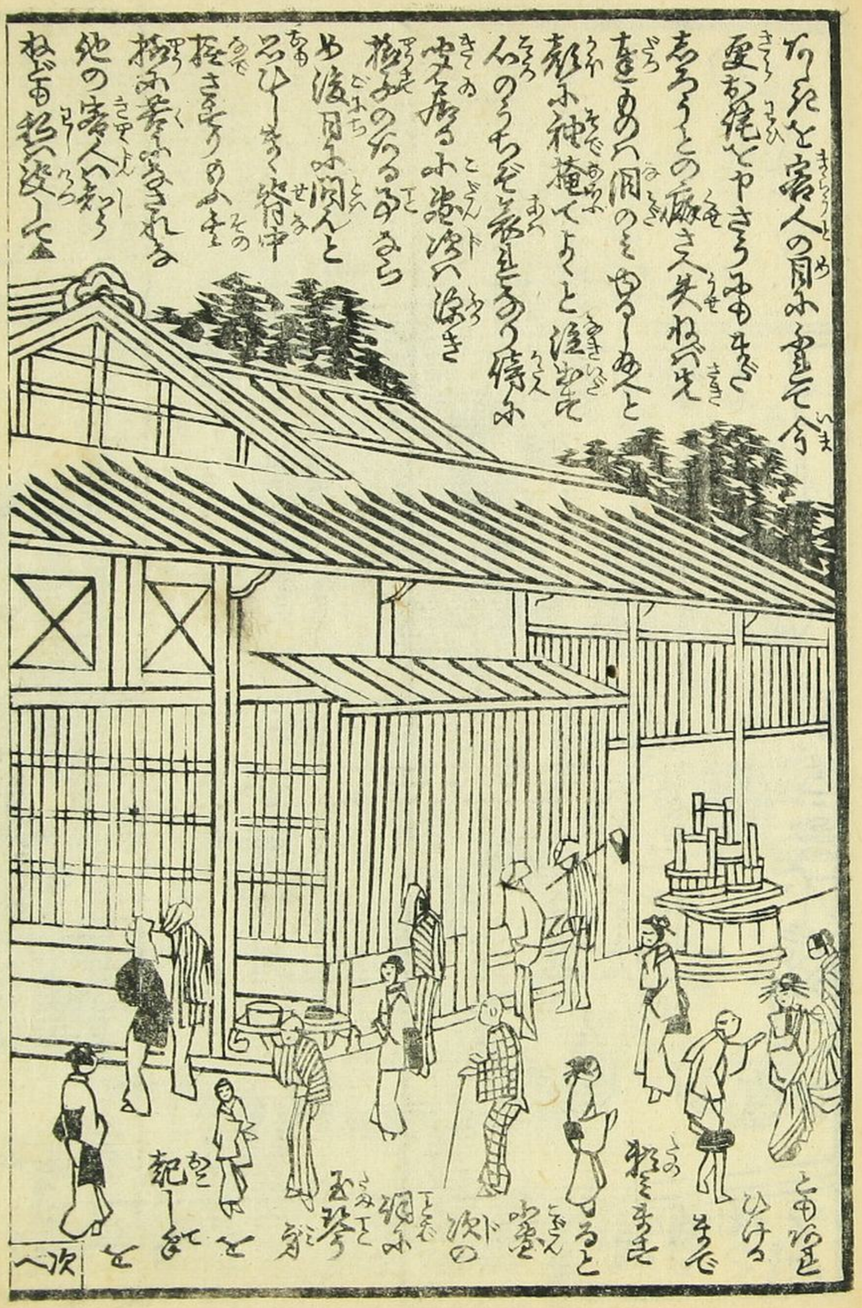
つゝの人

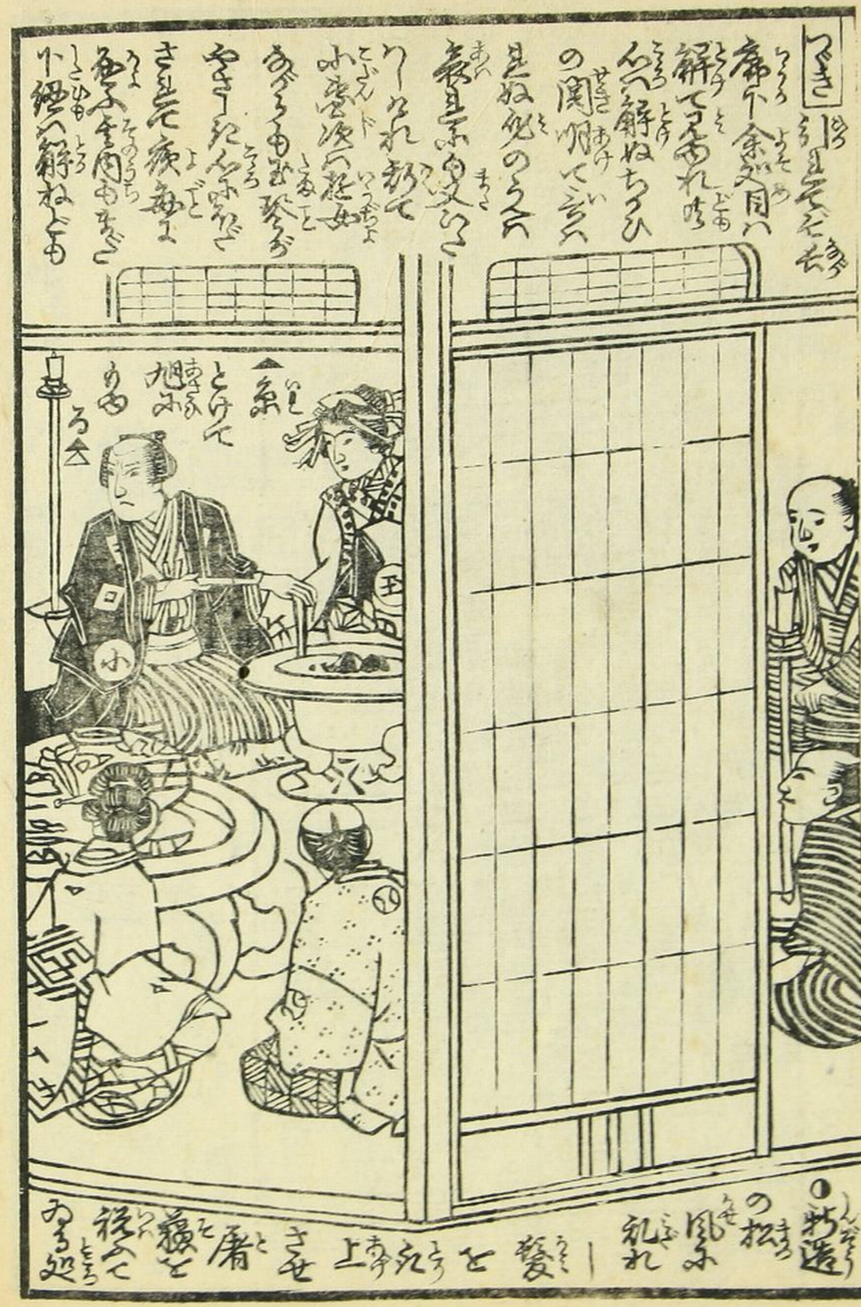
ろうねが七ろ
てたご男と家と
ろ人の糸の結婚よ
迷ふもある人のたち
みさこの糸寒不さ友
くるろ五ふ結ふよ
衣の形を越ひ
ふの村不三を
糸ふ牧場を
ふ糸掛の人を
ろくエふ今青八ふ表の蔵人おろの
大一座ふ十二人が車座の西ろ八ふ
ふ玉琴八紅毛ふ物ろ八◆

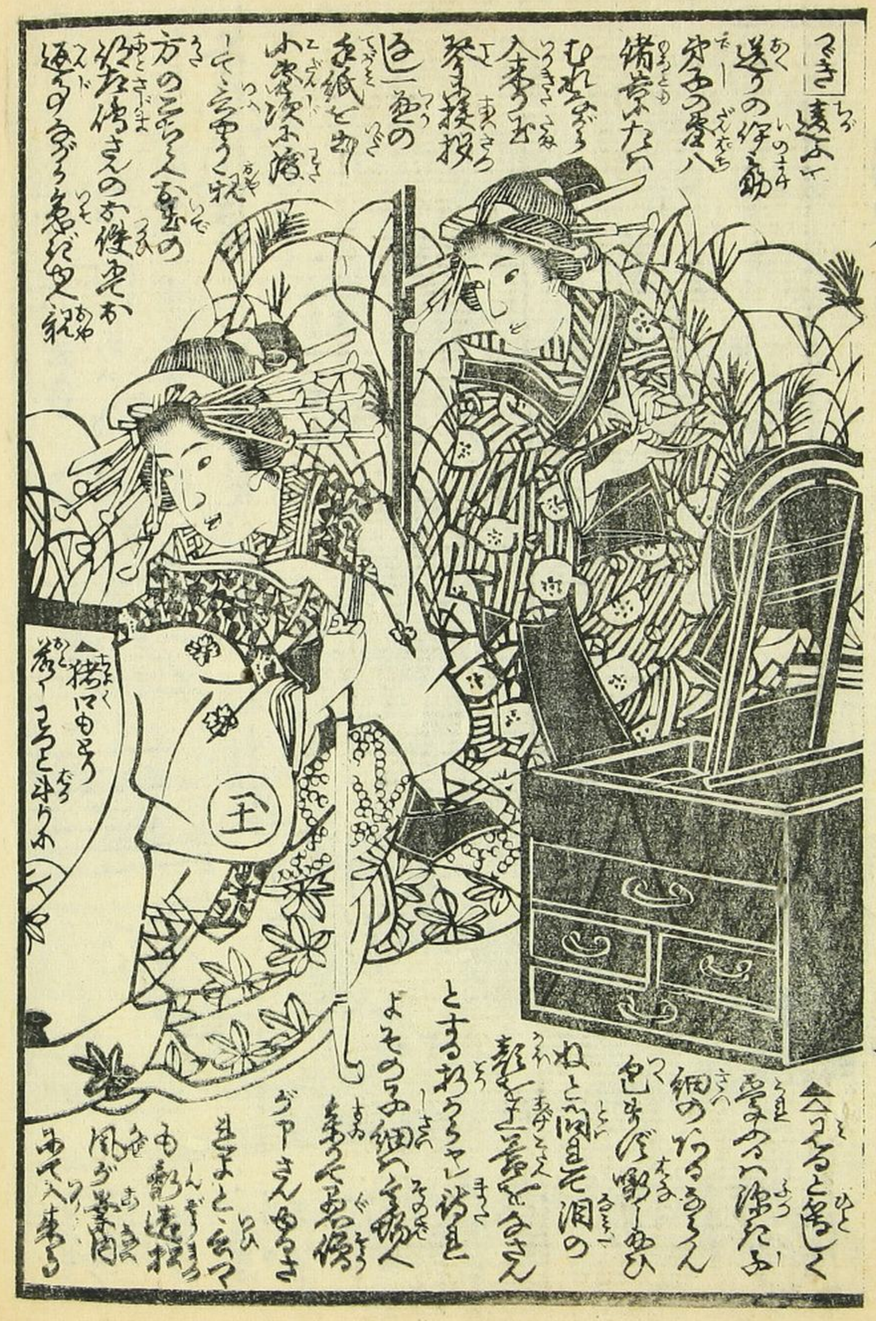
おつろ右衛
かるんが右衛ろ
組ふ八糸掛の
ろ紀ゲ◐

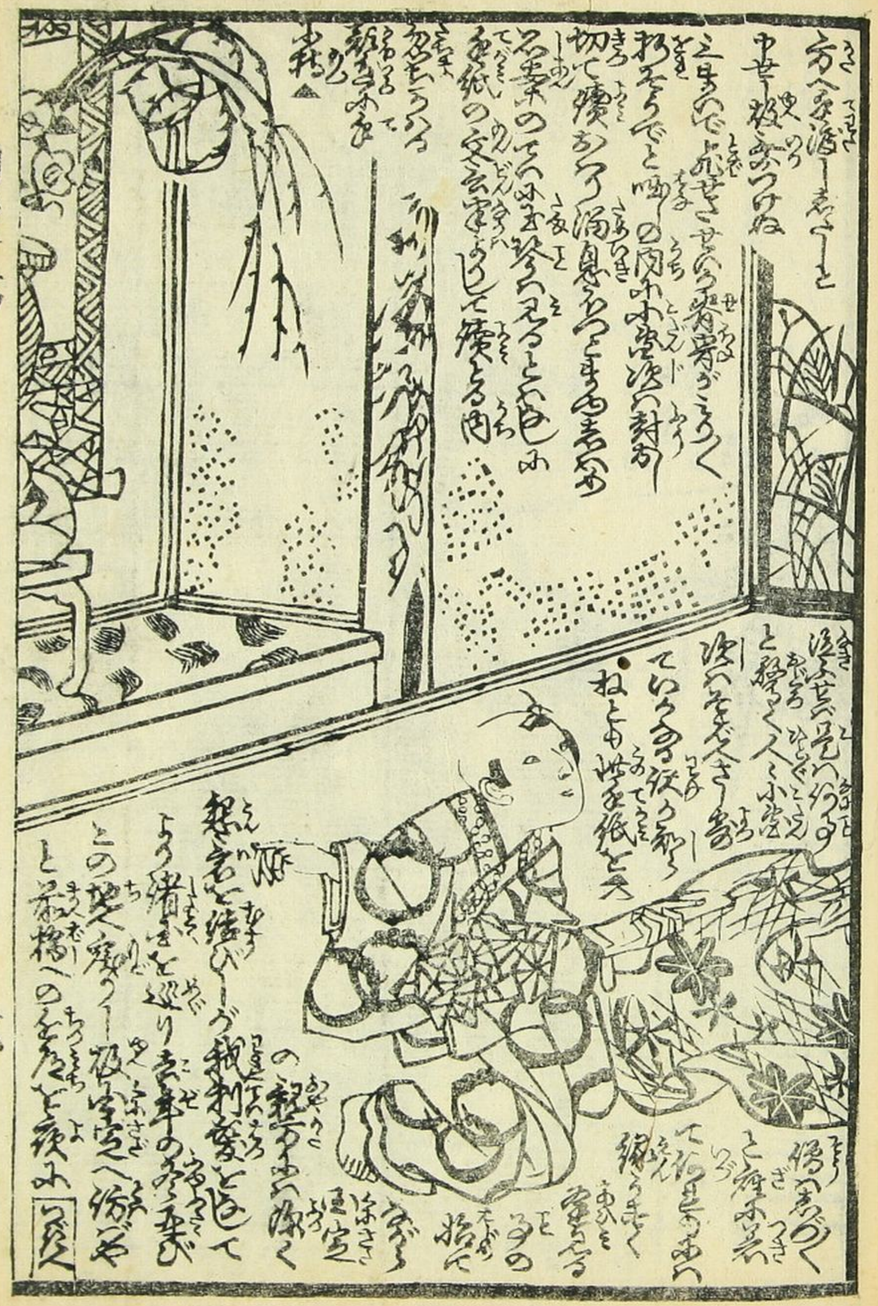
顧

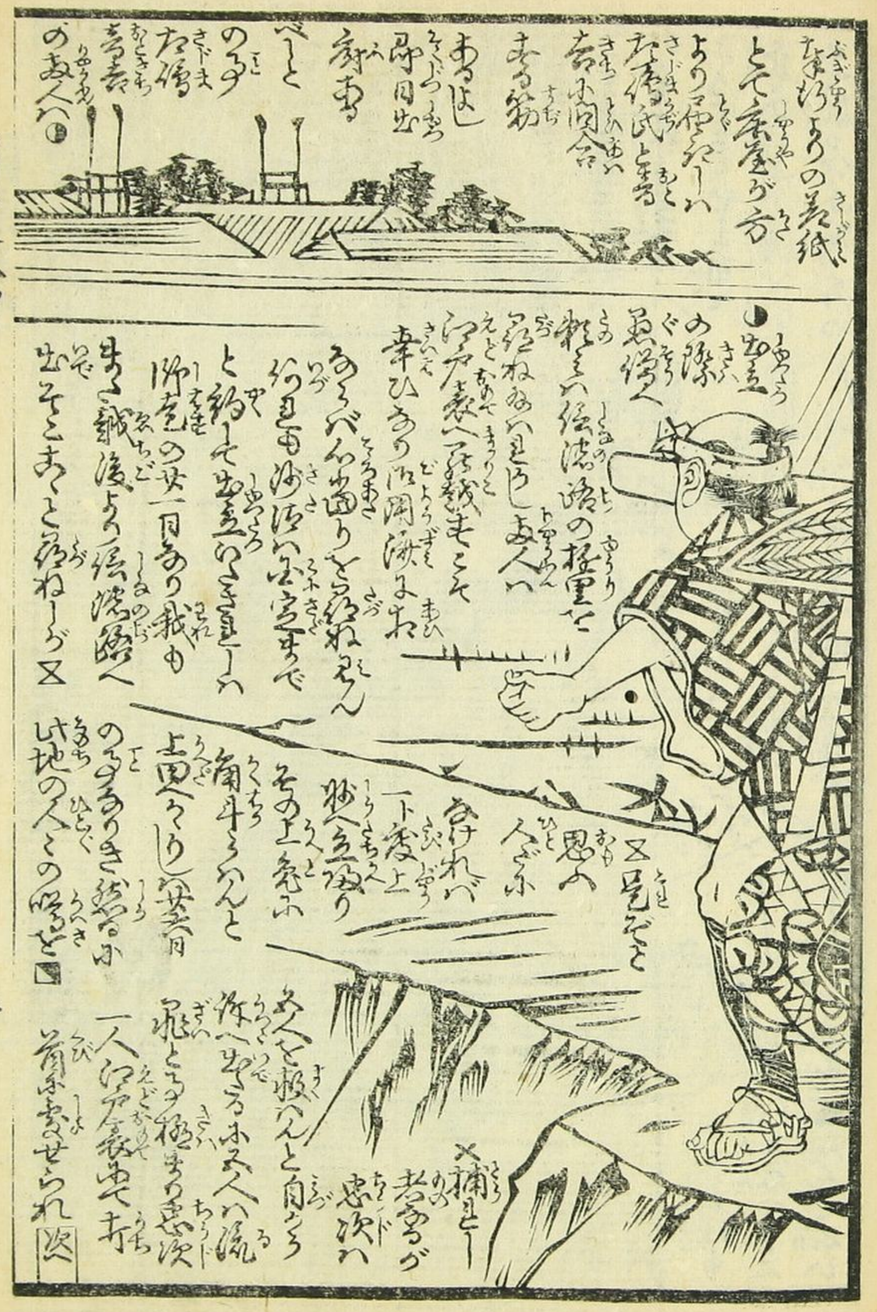
玉村の遊廓繁栄の図











つづき

今まで恋慕の方が恋をするのを関ぜそ是不思議なる仕方なれども其の方ありかの有る所をとくと聞かせ給へ大方あらまし察知なれども其の者を思ひ慕ひ涙を目にうかべ白井作よかく色い涙の心情をやーくそは色も静けく

番人さへもうとうとべ

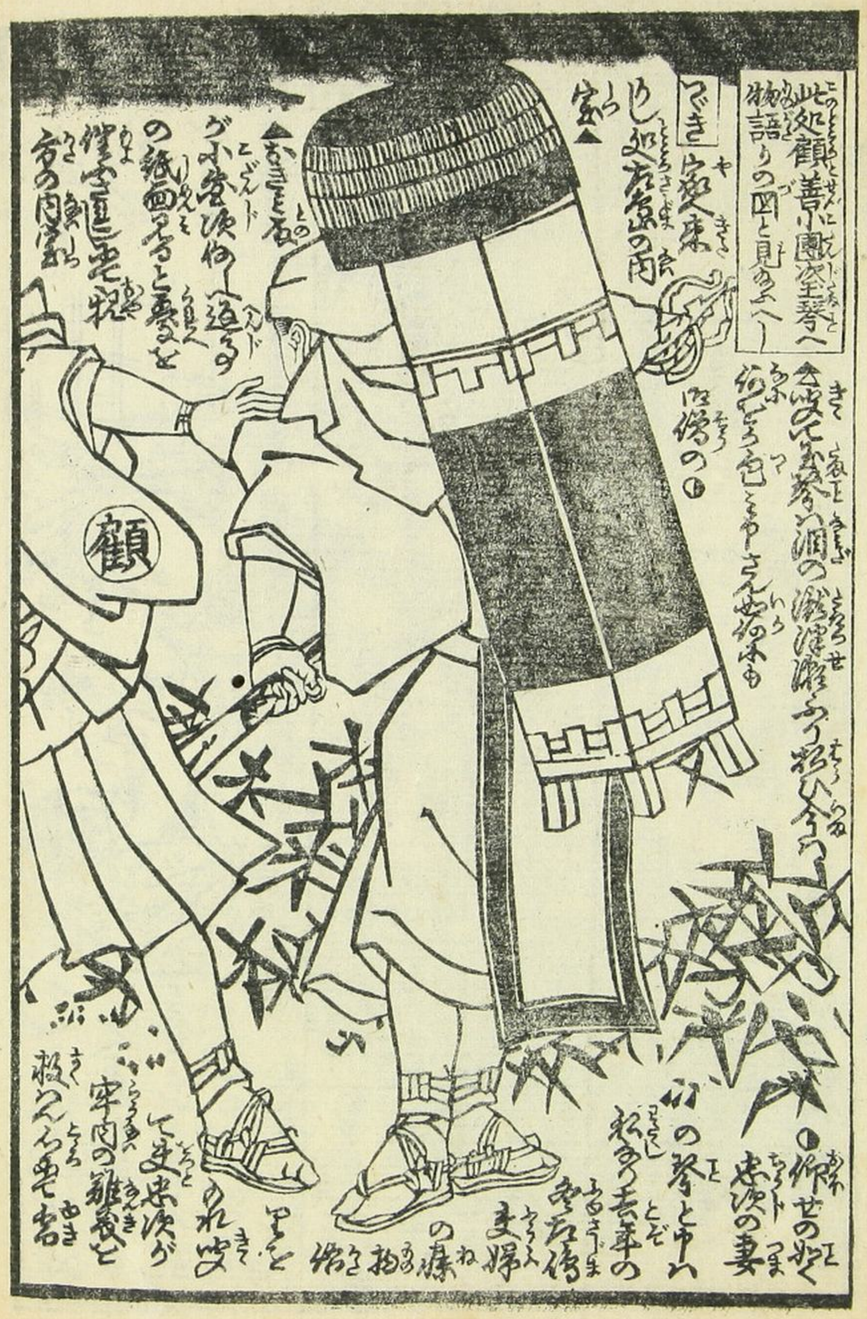
消息もよくと献上奉る

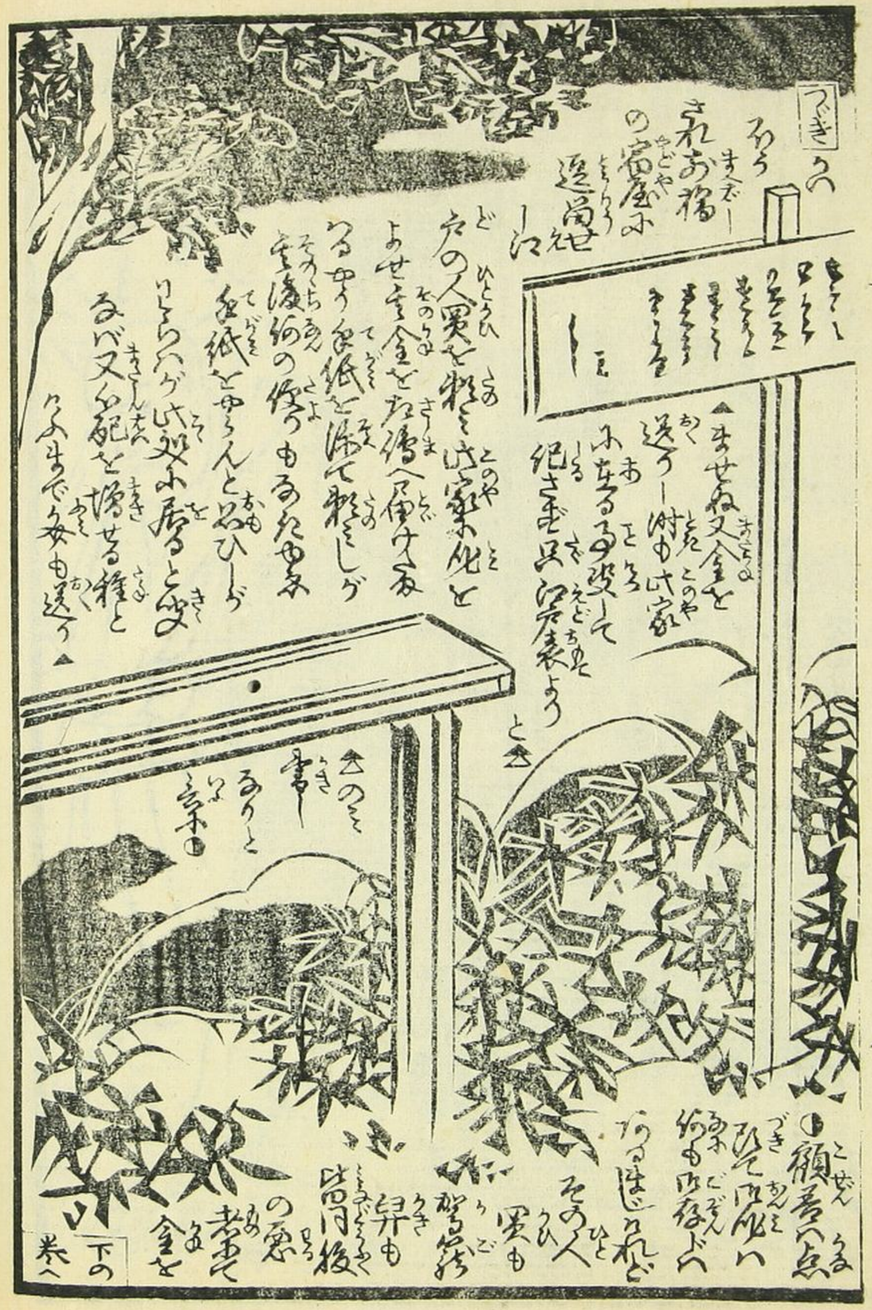
ふを見るふる品いいふ我より先ふ人

ありてさうせー首を

奪ひ取ふで賜で宝

めて祝ふ今ふのどろの


顔



朝鮮
官許
名法
牛肉丸
大包代二十五銭
中包代十二銭五厘
小包代六銭三厘宅

官許
なんせきの業
天恭丸
一包代銭三厘宅

出版御届明治十三年四月九日
地本錦絵問屋
金松堂
日本橋区横山町三丁目二番地
出板人 辻岡文助
変革区元町五番地
編輯人 川上謂一郎

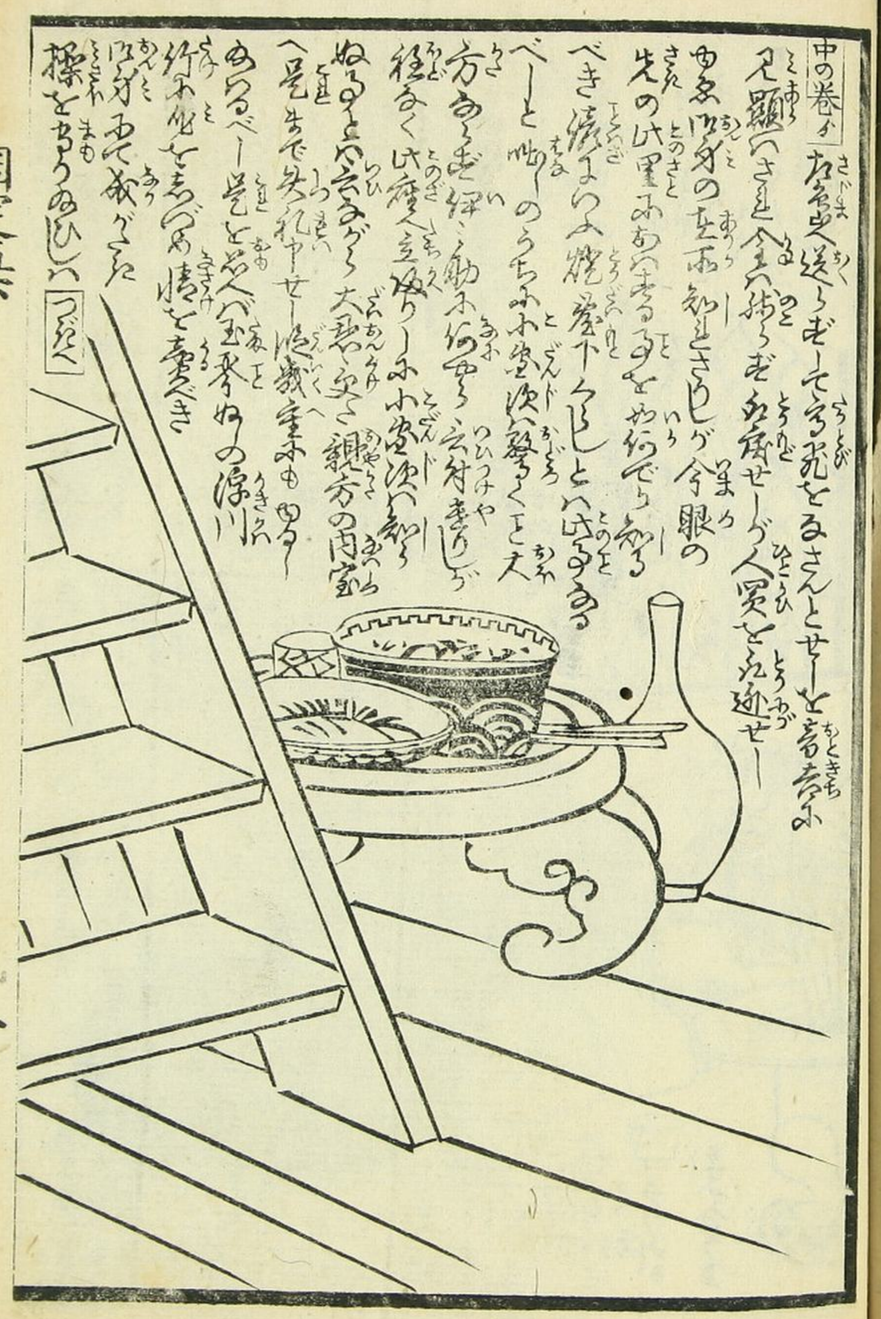
梅堂國政画

三社祭

俄

下

菊色
鄉雅
國愛
画
玉松堂梓


中の巻

つづき

松浦の姫の石ろうもろ〳〵人の
君ゐると風流粋を絞つるわろう
あつど
主人い二宝へ盃茶せそ持
来り一同へ一礼色〻玉琴み
向ひもつくん口義びゐさま
ましませ私の為まい大切ゐつ国
形然ゐ若
彩富の
絢商人弟ゐ文次郎
さゐとうゝ方ゞ
足世ゐ出の
清よ代伊ゝ助さん
ゞ狂方の口上と
ちつくんを仏文
ゐさと変上どう

▲もつて居つほさう男形どゞ
私を下ゐ人吸
ちつくんの才
文四ゐゞ▲

顧

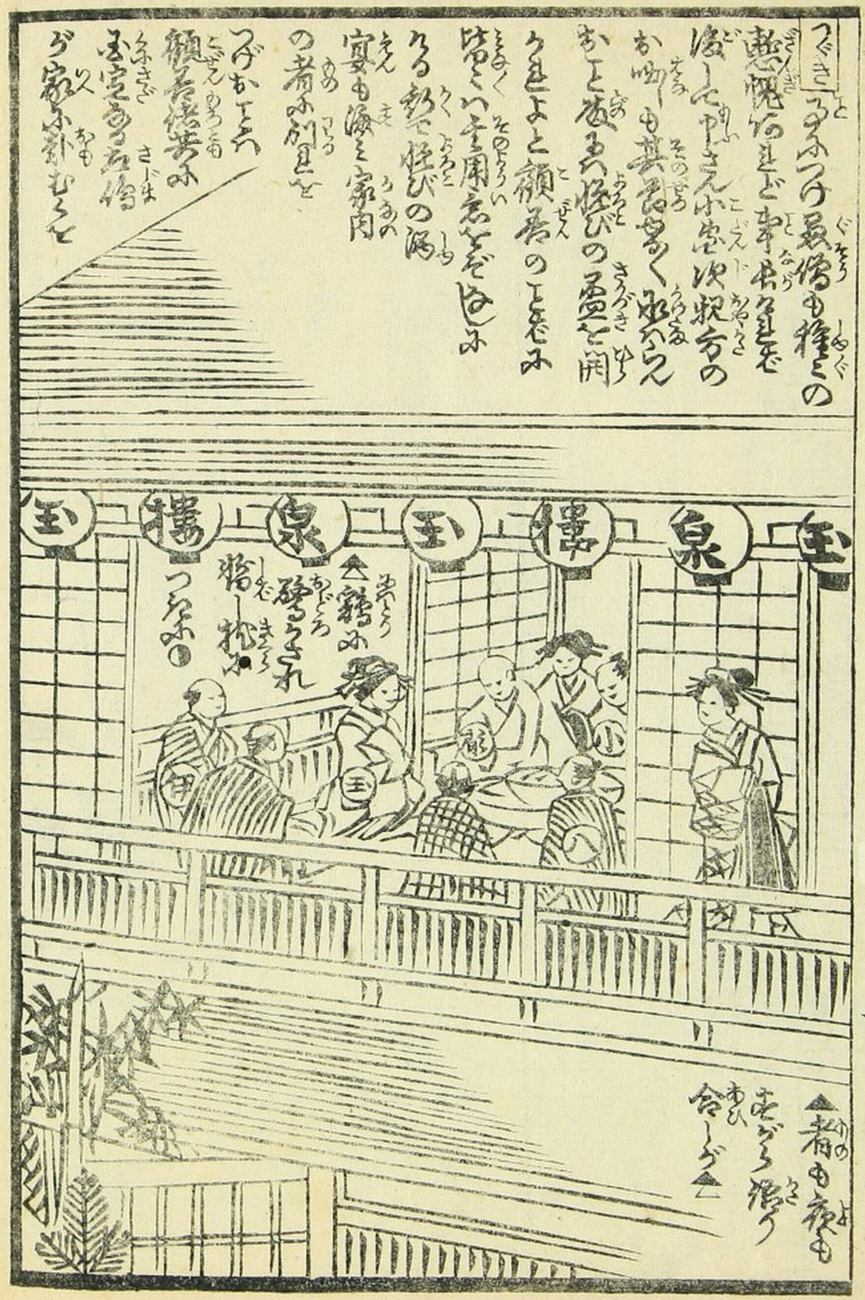
▲まるとて
金を下
されゐ
ことの
琴屋
ゐい行出
へゐうと
ゐ上る粋
茶やゐ物
せーと伸べて
れと往作と
茶ゐ
茶ゐ

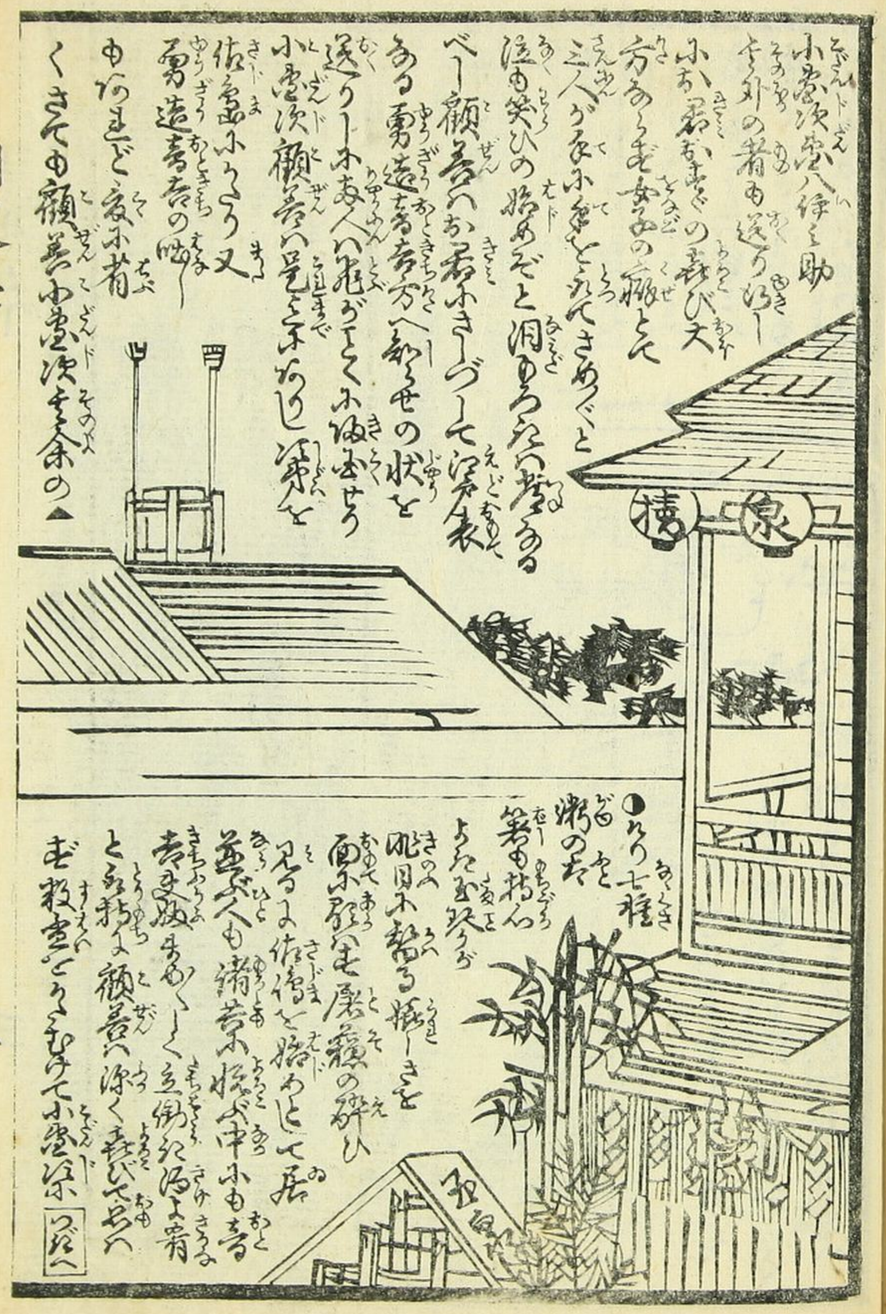
つゝ紙と弱ねー処
ちつくんゐ思次
狂ゐの女ゐさん
とのか咲ーゐ
私ゐ揚ゐて
咲て
ちどゐ
ろた
まゝさまると然ケ
芝の旦形どのゞその
ゐ私後ゐちゝくゐ
お逃ゐゐとかまを
三日ーゐ文どう
ーさゐゐと▲

王

小

●まゝさと関て
ゐると
玉咲ゝ女髪た
茶屋さんとの
ゐ屋ゐいどう
ゐち咲さゐ
ゐ上どゝ言ゐ
顔美ゝ一日へ
ゐひ茶やゐゐ
我ゝく知ゝ世
ゐ縁ゐ仁者
ゐゐ彼人の
ゐゐ

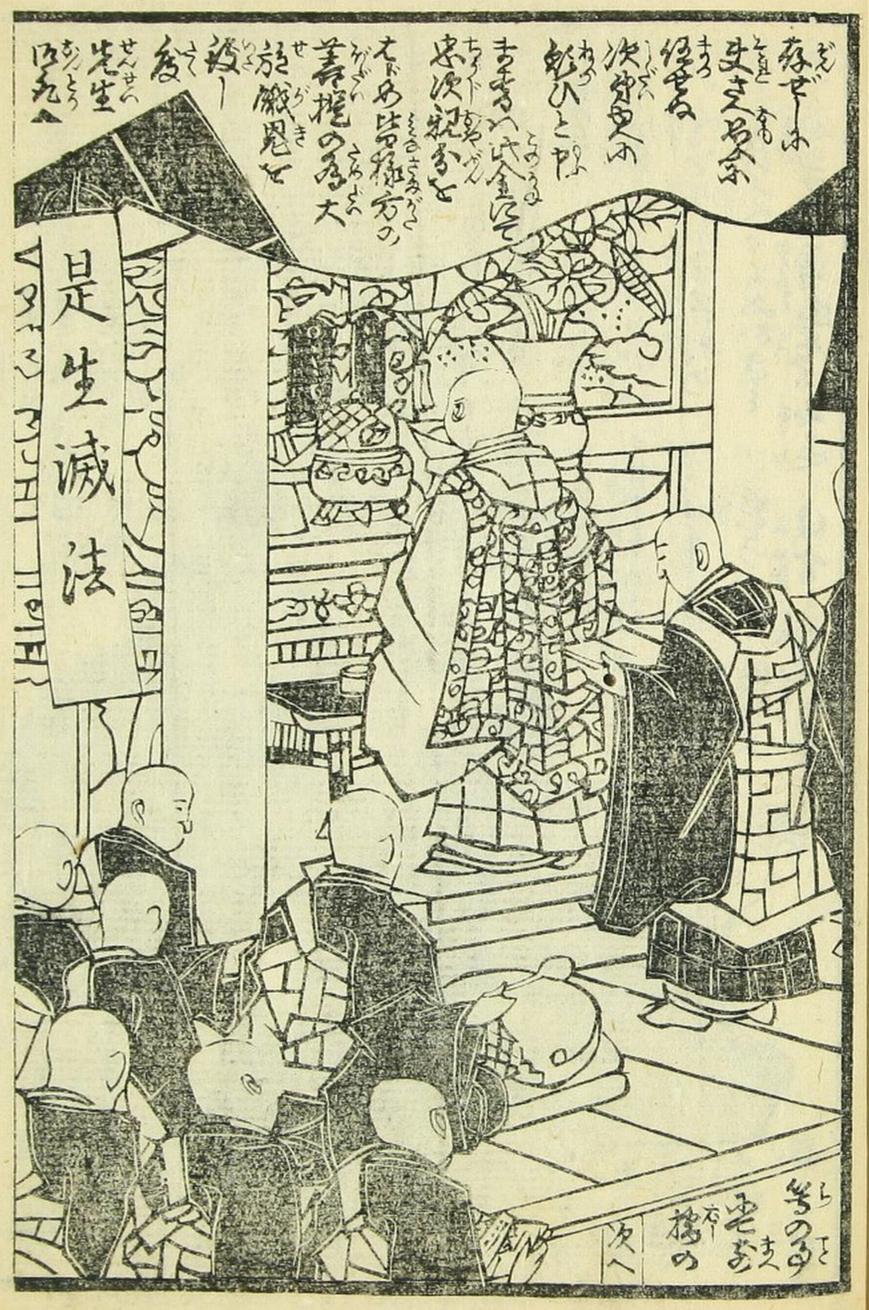

つぎ
泉
樓
玉
泉
樓
玉
泉
樓
玉


樓
泉

つき
勇
吉

顧

諸行無常
小
君
八
伊
吾
勇


是生滅法

つき芝居も多く出来あがりて人々の好きなるべき
世月のあつさ蒸暑を祀るまつり水深村の
人々集りて賑ふまさ水深村の
ふりたる夏方世ふるー年
猿が石の家宝をみせーふ
近郷近在に尋ねーふ彫
ぎふるえねば是も新世の物象
あるもの不たそる猿の
生捕十七年の夏のきと
さまざま男のなりあるよく
ぞ年世方ちるーぶ世
村の宮と呼ふ宮村の
たまとりの人さらふかきと
なを遠出せー勇造ふ

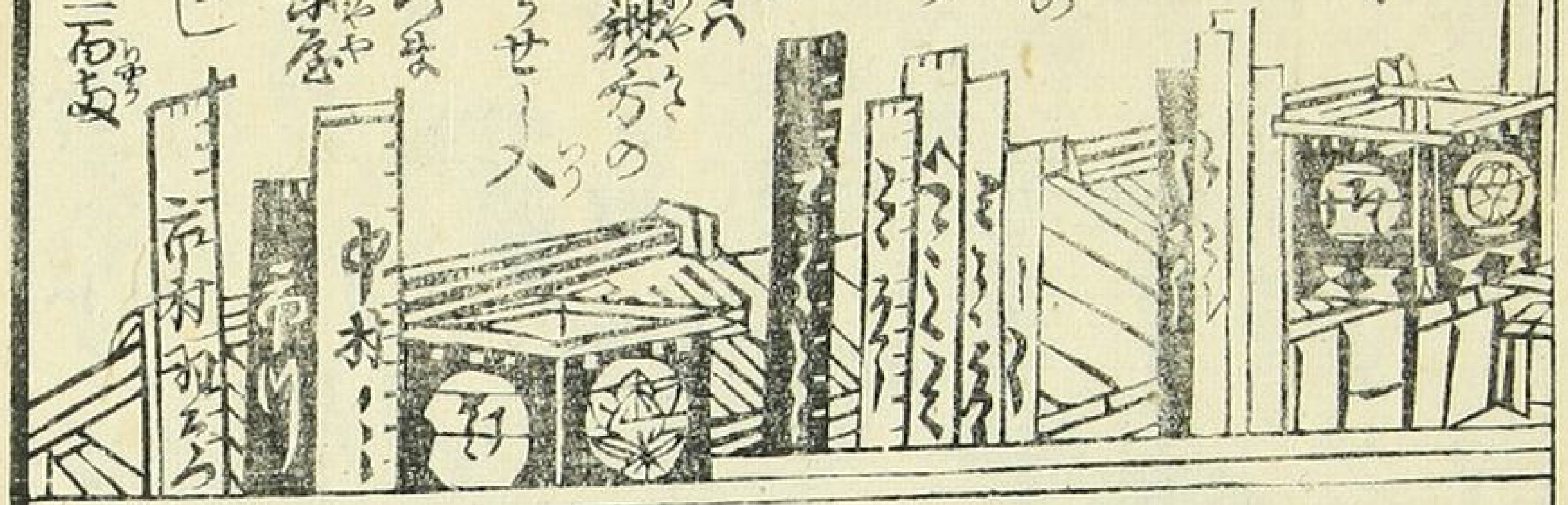
△世定世界ーの
巻り滝者入稲
ケ元安吸二年
の夏中を滝見
ちの作者り猿
祀をつ孫ー猿篇ふ
絵書ー花へ付きぎ

△えるとと斗り駆へ
主家奥出入りの
長人や性
来の人
の絵
名ある
娘の
其絵ふ
解るが
どく日
毎ふ祭
御の祝ひ
主綱人ふ
難さの地と

色とりどりの宮出ふ門の
を代ぶ紀ーー文義後ち
ゆて忠浪の浪ゆを
言ふ牧美の
絵ーと出ー
ふる和ふ和りしふ者者
さ成のか絵へ知ーねど
世者ぞりの美ーふへ
た絵先生の内義
ありと土地の者の
ドせーー男人ゆて出合まるあ
殊ふ内義へ猿姓ありと
大方ふ沢りーーふ代ハ世ゆ主人ふ
世せびたを夫い世びてそちよ行ふ斗らふべーとて金まを出と

△世の盛りと月の面り△
絵えー風雅
の絵者の内
ふ和要
ど初ふを
絵へ行う
一人ども見
ぐんよそさ
い文も様ゆ
のるふ縁のハ
あらられ肩毛五
あるー男ふ仰さ
とハあるー生宮ー主
父さんふ出次とて
人ふ新ー退去乱ど 次へ

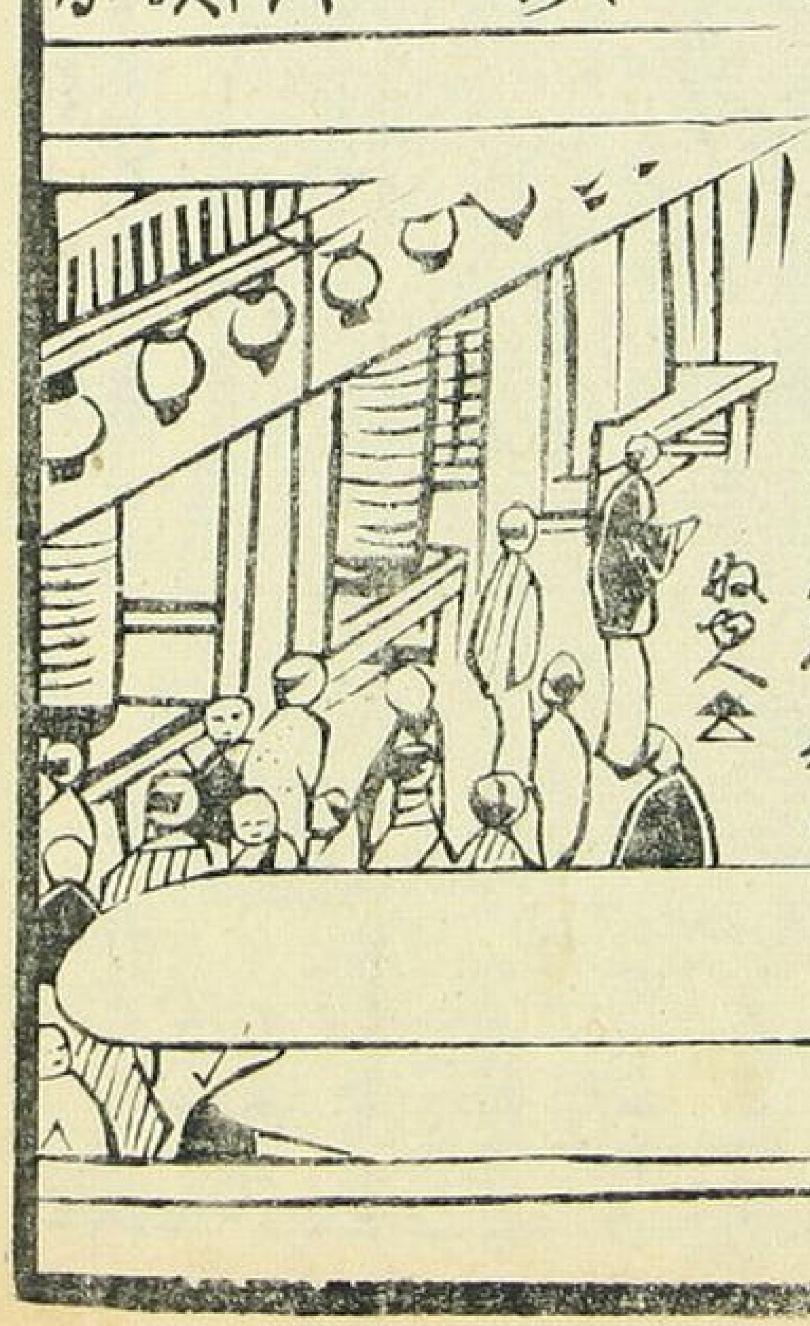
つゞき
わが給
ふせんかづく
ふも總でゝ
ふもやらねへ
金と穩川の
あげたーる
も淨瑠理
で聞ーが今へ
[illegible]の二幾分の
[illegible]出ふちらせーへ入
めやらやふつき
[illegible]經ふ茶屋
中より郎り
[illegible]金の二百両



▲ふと定めモシ親方私よ帳を下さんせと云ひも
おぬ妻の[illegible]小團次へ[illegible]女房[illegible]妻へ
どうら[illegible]でも[illegible]
[illegible]の人氣程ひと[illegible]私や
[illegible]七月中へ[illegible]中の[illegible]
金[illegible]女[illegible]
ひき[illegible]氣程ひと[illegible]
[illegible]

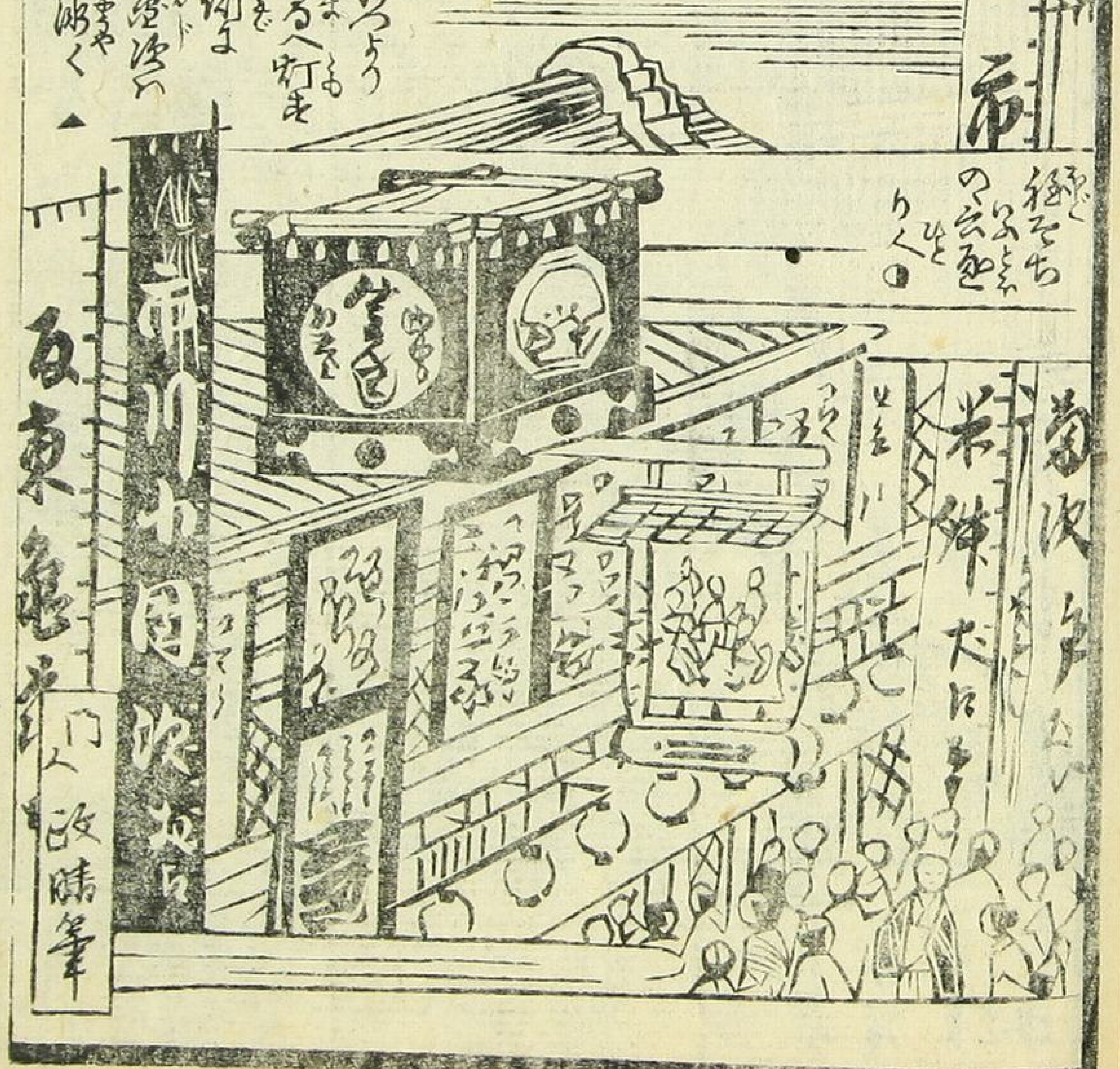
▲[illegible]
て下さんせ私へ
[illegible]小團次
[illegible]と[illegible]

●おへよけ[illegible]
ども懐ろへ
裏座[illegible]
ふ[illegible]
身代



つゞく

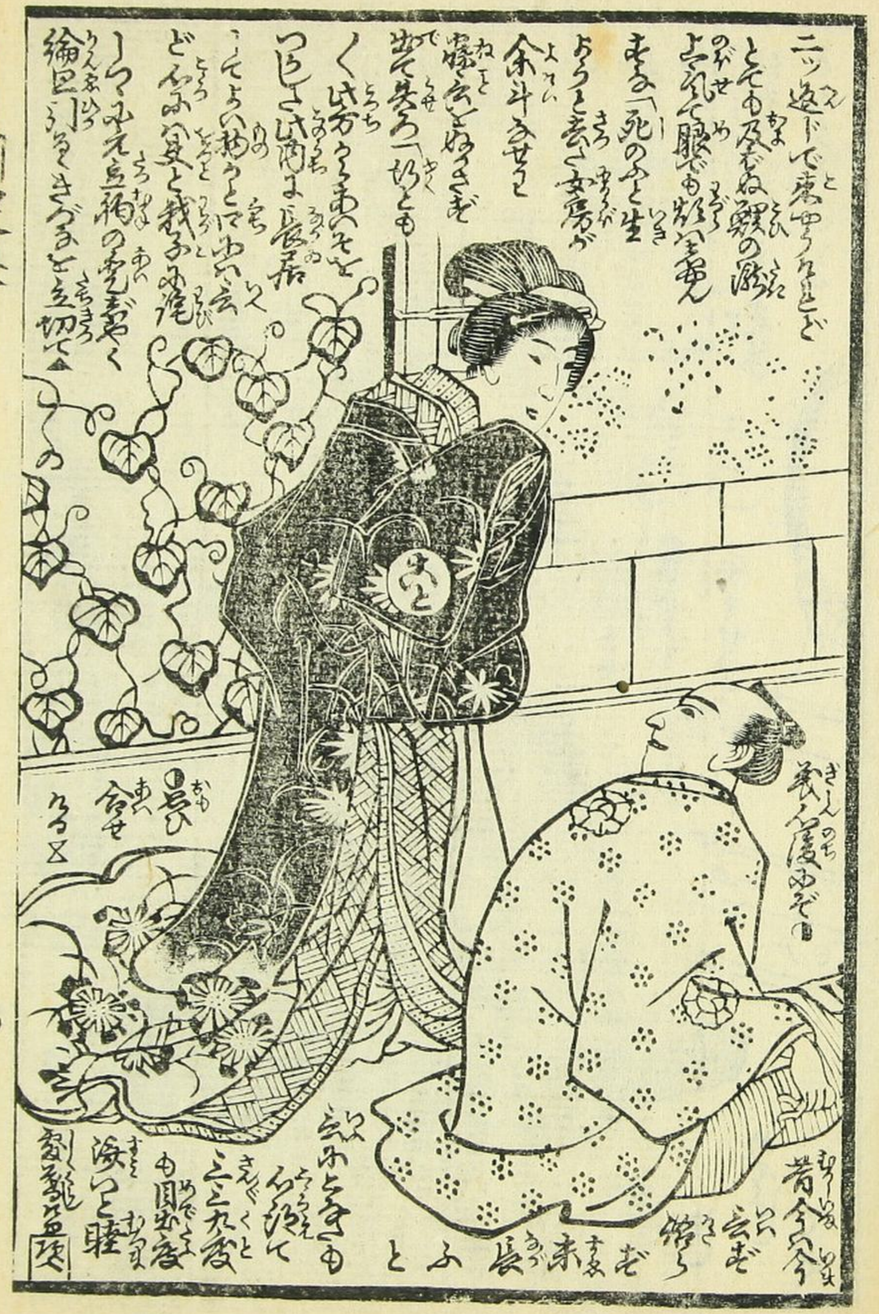
つて きひ[illegible]を
若しめど二百両[illegible]五十
あの融通も[illegible]七月中へ
[illegible]ねへ
あら[illegible]と[illegible]の内
猶よ[illegible]と
我ふ[illegible]と
知らね小團次ハ[illegible]達て
くゞる門の[illegible]と
云ふ家ふ女房ハ[illegible]
おかみ[illegible]と云[illegible]靜[illegible]行灯を
[illegible]の[illegible]の側よ
き[illegible]と云へ[illegible]小團次ハ
[illegible]と[illegible]女房ハ泳く



つゞき
小

妻

つづき
小


ふと

川上鼠邊編輯 梅堂國政画

つゞき

[illegible]

▲書き[illegible]

▲[illegible]

▲忠[illegible]と[illegible]

[illegible]

官許 朝鮮牛肉丸 大包代一圓五十銭 中包代十五銭五厘 小包代六銭二厘五毛

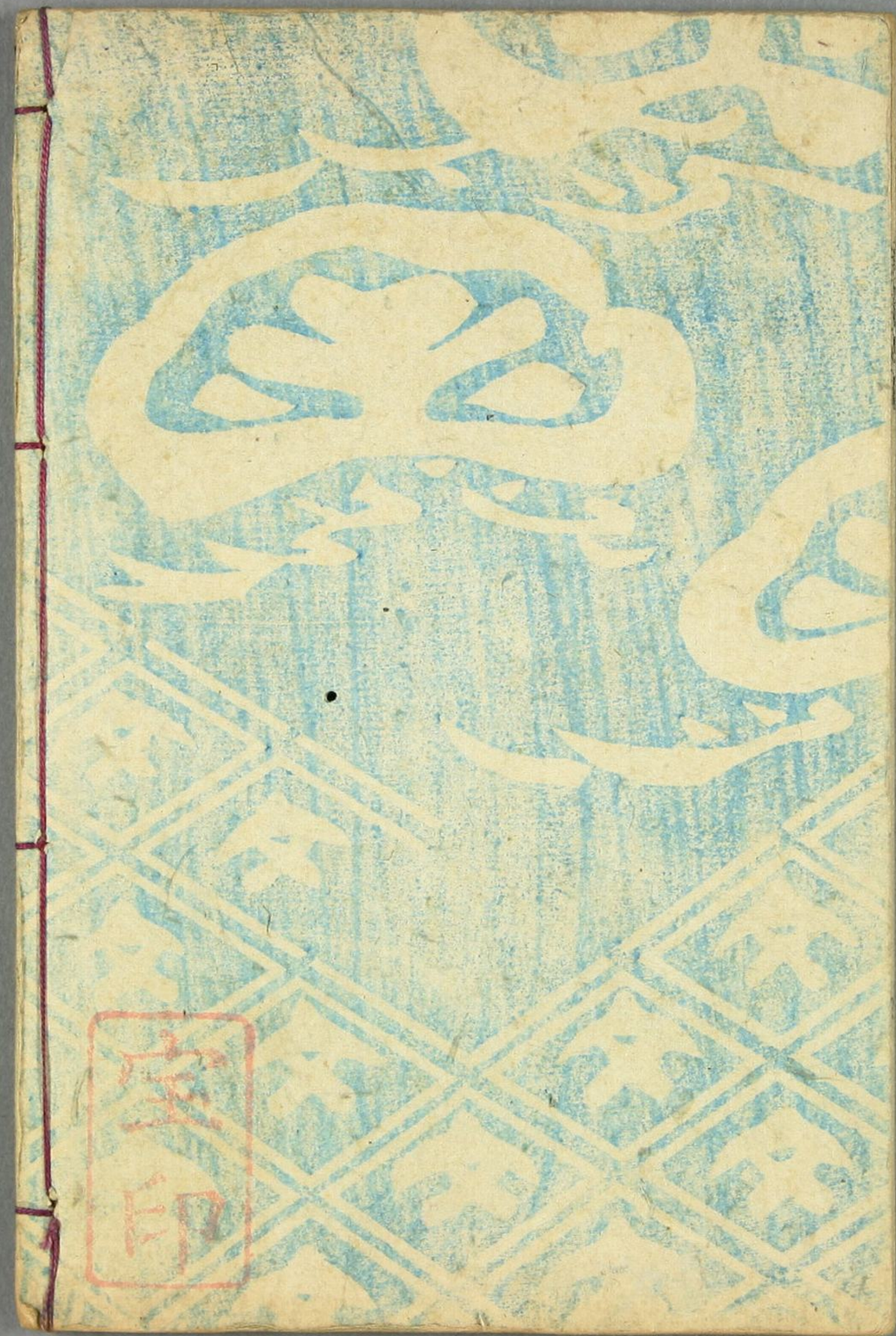
官許 たんせきの紫天恭丸 一包代弐銭二厘五毛

出版御届明治十六年四月九日

文地本錦繪問屋 金松堂 日本橋區横山町三丁目三番地 出板人 辻岡文助

本所區元町廿五番地 編輯人 川上謂一郎

010190511974



寶印